
機動戦士ガンダムSEED DESTINY 蒼天の黒龍

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED DESTINY 蒼天の黒龍

【Nコード】

N0888L

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

馬鹿の戦いは終わった。2年後もう一人の馬鹿の戦いが始まった。

第一話 新たなる戦い（前書き）

名前	レン・ルティア・メルキス
年齢	18歳
星座	うお座
種別	コーディネイター
性格	天真爛漫
口癖	「猛を倒すのはあたしだ」
戦闘スタイル	仙心清流拳体術・剣術 軍式格闘術 忍術
得意スポーツ	喧嘩 拳法
特技	空蟬の術（別名変わり身の術） ゴキブリを素手
で掴む 経理	
趣味	貯金
好きな物	猛 戦友達 実家
嫌いな物	猛 悪党 ピーマン ついでにギルバート・デュ
ランドル	
好きな食べ物	コーヒーズリー
興味無い物	ギルバート・デュランダルの理想
大切なもの	猛から貰った指輪・ロケット 仙心清流拳極意書
容姿	ロングヘア 蒼髪 ちよつと痩せ型 顔（可愛い＋美人÷2）
身長・体重	168cm 68kg

コンプレックス 猛より身長が低いこと

経歴

ザフト軍↓自営業兼フリーター兼拳法師範兼傭兵

特殊能力

SEED 超生命力 超身体能力 獣の力（龍）

イメージ的ボイス A水○奈○ B川○綾○

備考 先の大戦から2年経過したレン。2年間猛と共に貧乏生活が続いたため金勘定が神業レベルのスピードになった。猛が厨房に立っているときは主にエプロン三角巾姿で注文をとる会計を済ませるといった仕事である。普段から貧乏なため猛のスイーパー家業の傍らベビーシッター、財政經理の事務などのバイトの日々を送っている。また仙心清流拳師範の名目上出稽古にも行っている。猛との勝負癖は相変わらずで今のところは勝ちを保っているが本人は納得していない。猛とは相思相愛であるがいまひとつ素直になれない様子。髪を伸ばしたため大戦のときの知り合いからはキャラが変わったなどと冗談を言われる。本人曰く髪を伸ばしたのはニコルの遺言？だかららしい。因みにピーマンが嫌いになった理由は昔猛に無理矢理食べさせられた挙句ゲーしたからである。孤児院の子供達からは『レンのおばちゃん』と呼ばれている。本人曰く「あいつらが大きくなったらおばちゃんだから良いか」らしい。税金はちゃんと払っている。長年頭を使った生活をしてきたせいか戦うことの理由を正義と悪の二極に分ける。なお『本気でキレた猛』を止める事ができる唯一の人物。

第一話 新たなる戦い

第一話 新たなる戦い

あれから2年の歳月が経った。あたしは猛と世界を放浪した後オーブの漁師町で小さな食堂を経営していた。料理人は猛であたしはまあ配膳係かな。まあ経営は軌道に乗ってなくてこいつは儲け主義じゃないからね。まあそんなボケ旦那にくっ付いてるあたしもあたしだけ。普段あいつが何やってるかっつて言うのエロ本読んだり、料理作ったりテレビ見たりマルキオ導師のところに宅配なんてのもあったな。あいつ「おいちゃん」って呼ばれてるんだよね、あたし「お婆ちゃん」だけど。まっあいつらが大きくなったら、お婆ちゃんだしっか。なども思っている。まああたしとの喧嘩以外はあんまり戦いはやってないけどね。まああの子を巻き込んだじゃ不味いけどやってるのは悪党退治くらいかな。まあ殺しじゃなくて非合法的な手段で手に入れた証拠を提示したり孤児作るような奴を3分の2殺しにしたり。こっちで生活してるようなもんだわね。

「じゃあちよっくら行って来るわ」

あたしはそのまま店を出るとカガリの付き人になったアスランとカガリを影から守るといふ依頼を受けてアーモリーワンに向かった。それとついでにザフトの潜入調査だって。あたしは昔ザフトに居たからぶっちゃけこの程度のセキュリティは問題ないけど意外と甘いんだよねプラントのこういうところって。

「それにしても」

あたしは基地をふらつきながら見物している。あたしが居た頃に比

べると技術が発達している。最新鋭機の宝庫だよここ。そういやあたしのあれは元気にしてるかね〜ジャンク屋の兄ちゃんに預けちゃったけど。

「ん？」

その時銃声のような音を聞いた。

「誰か居る？」

あたしは音のした方向に向かうとそこには水色の髪をしたガキがいた。マシンガンぶっ放しながらなんか言ってるけど。まああたしは見て思ったのは。

「動きもパターン通りってところかな・・・だけどあいつは人を殺してきた奴の動きだな」

前にエクステンデットだっけ？そんな奴等が居たけど、あたしにとってはぶっちゃけ雑魚だった。そうこうしている内に青髪のがキンチョに上を捕られた。

「あ」

「へっへ！制服の女は使えないなあ」

あまりにも舐めたこと言ってきたからガキンチョが弾丸打つ前にあたしはマシンガン蹴り落とした。ぶっちゃけこの距離ならあたしの間合い。引き金引くよりあたしの蹴りの方が早い。

「な！」

急に至近距離をとられたからガキンチョは焦ってる。

「せゝの!!」

あたしの拳がガキンチョの顔面をぶち抜いた。普通の人間なら前歯碎けるだろうね。ガキンチョは思いっきり顔面痛がってるし。けど歯は碎けてない。するとガキンチョは涙流しながら新型の青いイカに乗り込んだ。倉庫をぶち破った。

「あゝあ」

上から瓦礫やら何やらで押しつぶされるあたし。

「ちつくしょう!あの女殺してやる!!」

ガキが吼えてるとあたしは瓦礫から抜け出した。

「ぷは!死ぬかと思った」

流石のあたしもこんな瓦礫にプレスされたんじゃ死ぬ。だけどあたしは本気でキレた。

「制服の女は使えない?ざけんじゃじゃねえ馬鹿」

あたしは瓦礫の中から抜け出すと横たわってるモビルスーツに乗り込んだ。

「試してやろうじゃないの・・・」

あたしがモビルスーツを起動させると新型3機はあたしに標的を合
わせた。

「・・・三対一か」

黒いのがあたしに斬りかかってきて緑のがミサイル撃ってきて青い
イカが槍振り下ろしてきた。あたしは急にバックステップで避けた。
けど薄皮一枚やられた。

「ごめんね、強すぎちゃってさあ!!」

「ちっ！ガキがお尻ペンペンされなきゃわかんないみたいね!!（
鼻血吹かしながら言っても説得力ねえよ）」

あたしはこの新型のバーニアで速攻を仕掛けた。あたしは青いイカ
野郎に蹴りを食らわせた。けどあたしはなんかこの機体に違和感を
感じていた。

（くっそ！やり辛い!）

このあたしが乗ってる新型。確かに性能は良いGシリーズより遙か
に上だ。だけどどうもあたしには腑に落ちないというか合わないと
いうか、とにかく動かしていても違和感がある。前はこんな事なか
ったのに。青いのはあたしに槍を振り下ろすがあたしはそれを回避
しようとする。しかし。

「え?」

イカの槍が装甲をかすった。あたしは訳が分からなかった。

(なんで!? 動きは見えてるのに!!・・・もしかして)

私の中にいくつかの答えが生まれたがそれは全部機体のせいだった。

(くっそ! 機体のせいになんてできるか!! やるしかない!!!)

イカがあたしに槍を振り下ろしてくるがあたしは咄嗟にイカの腕を足で絡め落としイカの体制が崩れたところにアックスをぶち込んだ。沈黙するイカ。狙ったわけじゃないから助かるかどうかはパイロットの運次第だけど。

「あっ動いた」

イカは動いた。撤退していくけど動いたってことは死んでないってことでしょ。まあ良かった良かった。カガリもアスランと一緒にザフトの新型艦に保護してもらったみたいだし、まあここはこれで任務完了ミッション完了と言いたいけど。ちょっと不安だからもう少し付き合いますかね。あたしはザフトの新造艦に着艦した。

続く

第二話 復活の墮天使（前書き）

超久しぶりの更新です。申し訳ありません！

第二話 復活の墮天使

なんか分からんけど戦艦に乗ったらいきなり銃付きつけられるわ何やら・・・最悪引き受けるんじゃないかなったこんな仕事。

で？何か安全だ何だって案内されたけど正直わけわかんない。

モビルスーツはあるのにパイロットが居ないという状況。で、何処にも属さない傭兵のあたしはモビルスーツ一体を条件に志願した。

第二話 復活の墮天使

「うゝん」

自分の機体は自分で面倒見る。

これ傭兵の鉄則。

あたしはザク・ウォーリアをみて考えていた。なんか腑に落ちない。

「どうしたんだ？レン」

「カガリ」

格納庫で悩んでいるあたしにカガリが話しかけてきた。

「お前・・・動きは凄かったけどなんかやり辛そうだったぞ」

カガリは騙せないか・・・あたしは思い切って話してみることにした。

「あんたあたしがブラックフレームに乗ってたの覚えてる？」

「ああ」

「ブラックフレームの特徴は？」

「格闘特化の強襲突撃型」

「じゃ、ザクのいいところは？」

「汎用性があってどんな場合にも対応できる」

「けど逆を言えば・・・特徴が無い！」

「あ！」

そうザクやストライクは汎用性が高く対応がスムーズだが特化する部分が無い。

今まで特化している部分をフル活用して戦ってきたあたしは今更汎用機では実力を出し切れない。

「お前・・・まさか」

「そ。傭兵の悪い癖・・・本来の傭兵は提供されたものを乗りこな

さなきやいけないのにあたしはオーダーメイドスーツみたいに愛機をフル活用して戦ってきた」

「まさか」

「あたしはあれじゃないと実力を出せないってわけ」

納得するような複雑な表情をするカガリ。だがあたしは何か腑に落ちなかった。カガリの様子が変だ。

（・・・猛なら気の聞いた台詞の一つでも言うんだろうけど）

あたしにはそんな器用な真似はできない。そう思ってあたしは機体の調整をするのだった。

しばらく歩くとあたしは誰かとすれ違った。

確かシン・アスカだっけ？

カガリのこと目の敵にしていた奴だね。

「・・・よー!」

とりあえず挨拶するあたし。

「なんだよ傭兵か」

「・・・もうちょっと愛想よくできんかね・・・育ちが知れるよ」

「なんだと!?!」

喧嘩腰になるガキンチョ。そういえばこんなオカッパが居たような・
・今は隊長だっけ? 何であいつが隊長になれたんだ?

「あんた! ふざけんな!」

何やらあたしにわめき散らすガキンチョ・・正直右から左に聞き流してる。すると妙な単語が出た。

「俺の家族はアスハに殺されたんだ!」

その言葉で合点が言った。

「あゝそれでカガリのこと怨んじゃってるわけ?」

「そうだよ! 何であいつを護衛なんかしなきゃいけないんだよ!」

ガキンチョの意見にあたしは呆れた。

「まああんた軍人には向かないタイプだな」

「なに!?!」

「割り切れないんじゃないって事」

「お前なんか俺の気持ちが・・」

いい加減ウザくなってきたあたしは睨みつけた。

「じゃあ皆があえて言わないことをあたしが言ってやろうか？」

「なに！？」

「・・・いい歳こいて駄々こねてんじゃねえよ」

「な！」

あたしに一言で切られて絶句するガキ。正直ウザいからあたしはそのまま通信端末を取った。

宅急便を頼むためだ。

そして偵察任務であたしは借り出された。

「・・・」

どうも気に入らない・・・一見何の変哲もない・・・しかし何やら殺気でない邪気を感じる。

その時

「！！」

巡回していた味方機が破壊された。

「敵襲！！」

シン、ルナマリアが警戒態勢に入りあたしも戦闘準備に入った。

「く!!」

あたしに斬りかかってきたイカ。

「お前この前の女だな!!」

アックスで受け止めるあたし・・・やっぱり辛い。

ミネルバからの援護はあるけど正直きつい。

(くそ!あの機体さえあれば)

奥歯かむあたし。

その時

「機体反応!?!」

戦闘中域に入ってくる輸送コンテナ。あたしはそのコンテナに接近した。

「ばあか!格好の的なんだよ!!」

イカがあたしに攻撃を加えてくるがあたしは回避しながら接近した。

「来た!あたしの宅急便!!」

「れ!レンさん!!」

ルナマリアの制止を振り切りあたしはコンテナを止めない。

「く！」

あたしはパイロットスーツのバイザーを閉め外に飛び出した。

「！！！」

ザクは爆発しあたしは反動を利用しコンテナに乗り移った。

「ははははは！！！」

イカの一斉射があたしの乗ったコンテナを直撃しコンテナは爆発した。

「な！」

誰もがあたしは死んだと思っていた。けどコンテナから現れたのは・

漆黒の装甲

鮮血を思わせる赤い瞳

親友の左腕

あたしの愛機

ブラックフレーム

「・・・ふう・・・」

あたしはブラックフレームのコックピットで一呼吸おいた。

「・・・やっぱり・・・このシートが一番落ち着く・・・」

何だろう・・・機体に愛着なんて無いはずなのにブラックフレームは愛着が湧いた。

「んじゃ・・・行くか!!」

あたしは対艦刀を構えイカに斬りかかった。

「へ! そんな旧式!!」

性能では遥かに上回っているイカだが・・・

「な!」

イカの槍を掻い潜りあたしは蹴り飛ばした。

「この野郎!!」

イカが槍を振り下ろすとあたしは持ち手を掴み取りそのまま槍の軌道を逸らし受け流すとそのまま肘打ちを入れた。

「くそ！」

衝撃がもろに着たのかイカのガキはあたしに殴りかかった。

「・・・戦いで無駄口言うのは素人だ」

「な!!！」

イカをそのまま対艦刀で八つ裂きにした。

（S E E Dや龍を使うまでもないか）

と対艦刀を納めた。すると・・・

「!!！」

今度は犬があたしに殴りかかった。

「邪魔！」

「う！」

あたしは突進してくる犬をそのまま衛星の地面に叩き付けた。

「なんだあいつ・・・まともな戦い方じゃねえぞ」

緑の言うとおり正直あたしは俗に言う正攻法ができない。

どうしてもまともなパイロットがやらない戦い方しか出来ない。

「な!!」

そうこうしている間にあたしは対艦刀をサーフボードのように乗り込み突進した。

「が！」

右腕を持っていられる緑。

形勢不利だと判断した敵さんは撤退し始めた。

「・・・あれが・・・漆黒の墮天使」

ガキンチョになんか言われた気がするけどあたしは気にしない。

続く

第三話 不真面目な女

第三話 不真面目な女

ミネルバのハンガーに置かれたあたしのブラックフレーム。

「・・・これ見てくれよ」

「・・・うわあ」

ヴィーノとヨウランがブラックフレームの中身を見て驚いている。
そこに誰かが通りかかってきた。

「ん？どうしたんだ？」

「あ、シン」

「見てくれよこれ」

「なんだこれ」

ブラックフレームの中身を見て驚くシン。

「旧式って外見だけで中身全くの別物だ・・・それにこのチューン・・・ピーキー過ぎる・・・なんだよこれ・・・まともな人間が

乗る機体じゃない・・・あの女まともじゃないと思ったけど」

「ああ、だから一から直して・・・「あんたなに人の機体勝手にいじくってんのよ」！！」

あたしは背後からヴィーノを蹴り飛ばした。ブラックフレームをみると・・・

「あゝあ・・・なんて事してくれたのよ。また設定しなおさなきゃいけないじゃん」

と言って設定しなおすあたし。

「あんた正気か！？こんなチューンじゃ」

「あたしにはこれで良いの」

「何でだよ！ヴィーノが折角直してくれてんのに！！」

シンの意見にあたしは言った。

「マニュアル通りやれば良いんじゃないのよ」

「え？」

「整備ってのは一朝一夕なんよ。日々試行錯誤を重ねて自分にあったチューンを見つけ出す。機体を大事にしてくれる信頼できるメカマンとあゝでもないこうでもないって言いながら作り上げたんよ」

「けど！こんなんじゃないまともな」

「まともって何？」

「え？」

あたしにまともという言葉を質問され戸惑うシン。

「あたしら傭兵にとっては10人居たら10通りのチューンがある。まともに見えなくてもその人にとってはまともなんだよ」

「奥が深いですね」

と納得するヴィーノだった。

そして何か地球に隕石を落とすかなんかの情報が入ってあたしらは阻止するべく動いた。

「落ち着いてるなお前」

「猛に喧嘩売ってると大抵のもんは怖くなくなる」

「・・・そうか」

と納得するカガリ。そしてブリーフィングルームの前を通ると中でミネルバメンバーが話し合っている。

「砕くって・・・あれを？」

「あの質量で既に地球の引力にも惹かれているというのなら、もう

軌道の変更など不可能だ。衝突を回避したいのなら、砕くしかない」

あたしはいかにもという事を聞いていた。

「ま、それもしようがないっちゃ、しょうがないかあ？ 不可抗力だろ？ けど、変なゴタゴタもきれいになくなって案外楽かも」

（はあく言って良いことと悪いことの区別もつかんのか最近のガキは・・・）

こんな事一々考えるなんてあたし頭の中おばさんになったかも。

「よくそんなことが言えるな！！」

とカガリが部屋に怒鳴り込んだ。止めときゃ良いのに・・・

するとシンが睨みつけてきた。

「・・・止めろよ・・・ヨウランだって本気で言ったんじゃ「はいそこまで」なに！？」

見かねたあたしは割って入った。

「だがレン！」

「カガリ止めとけてこいつただ構ってほしいだけだから」

「なに！？」

あたしの言葉に激怒するシン。

「お前！アスハのきれいな肩もつのか！？」

「・・・うっせえな・・・ガキの戯言に一々付き合ってるほどあたしは暇じゃないんだよ」

「なんだと！」

あたしの言葉に目ん球むき出しのガキ。

「・・・そうやって吼えてろ・・・お前の被害者振りもウンザリなんだよ」

「お前に俺の気持ちか・・・知るか」

と言って耳クソほじるあたし。

「んじゃそういうことで」

あたしはブリーフィングルームを後にしようとするともた噛み付いてきた。

「待てよどこ行くんだよ！？」

「え？格納庫。機体のチェック」

「それなら俺がやったぞ」

とヨウランが言ってくるとあたしは蔑んだ目で見て言った。

「・・・お前みたいなカス野郎の整備なんて信用できるかよ」

「なに!？」

あたしを睨みつけるヨウラン。けどあたしは言葉を続けた。

「少なくともさっきの発言聞くとあんたの事は信用できない。整備って言うのは知らない相手とはいえ命預ける絶対の信頼関係が必要なんだ。お前みたいなカスに預けるほどあたしの命は安くない」

その言葉を聞いたヨウランは黙るのだった。

そして出撃体制に入るあたし達。今回はアスランも出るみたい。

「レン・ルティア・メルキス! ブラックフレーム! 出る!！」

出撃するあたし達。そしてあの3馬鹿が発進してきた。

「あいっら!」

「今度こそ!！」

シンとルナマリアは3馬鹿に突進した。仲いいあいつ等・・・そしてあたしは呆れた。

「・・・馬鹿が目先のことに惑わされて」

あたしが言うのもなんだけど、今は地球がやばいのに放っておいて目先の敵に突っ走った。

（結局偉そうな事言っておいて地球なんてどうでも良いんだな）

そしてジンがあたしに襲い掛かってきた。

「ち・・・こんなもん地球に落とすなんてどう考えてもギャグになってないって!!」

工作に入ろうとするあたし。その時。

「レン！」

「ディアツカ！お前降格したのか!？」

久しぶりに会った緑服のディアツカはがっくしした。

「お前久しぶりの第一声がそれかよ!!」

「あはははは」

「貴様ら遊んでる場合か!!」

と通信に割り込んできたイザーク。

「よ！あんた隊長になったのか」

「ああだからきさ」「世も末だね・・・」なんだとおお!!」

相変わらず面白い奴め。とにかくあたしは石ころに向かうが・・・

「!!」

犬っころがあたしに牽制してきた。避けるあたし。

「・・・構ってやるほど暇じゃないの」

と言ってとっとと工作に入ろうとするあたしだが犬は追いかけてくる。

「くそ・・・しつこい・・・」

犬があたしに突進してくる。なんかあたしに狙い定めたみたい。

鬱陶しいったらありやしない。

「お前！お前えええ！！！」

「うっせえな・・・お前に用はねえんだよ！」

「ふざけるなああああああ！！！」

犬の形態になって突進してくるとあたしは正面から受け止めた。

「な！」

「ふん！」

あたしはそのまま犬の頭をへし折りそのまま持ち上げパイルドライバーを浴びせた。衛星で戦ってるから思いつき突き刺さってる。

「この！」

起き上がろうとする犬に対し・・・

「ああ！まだ起きますかっ！！！！デザートは！！！！？」

あたしが無理矢理首根っこ引っ掴んで起こし頭を殴りつけた。再び地面に突き刺さる犬。

完全に沈黙する犬。

「たく・・・手間取らせて」

と言ってあたしはアスランを援護するべく起動し損ねているメテオブレイカーに向かった。

「・・・」

ザイルかなんかを打ち込めば動きそうだな・・・あたしがとった行動は・・・

「いっせいのせえ！！！！！」

メテオブレイカーを拳でたたきつけ無理矢理出っ張りを突き刺した。割れていく石ころ。

「こんなもんかね？」

「撤退しよう」

あたしとアスランそしてシンが撤退しようとしたその時。

「これ以上はやらせん！」

一体のジンが襲い掛かってきた。

「あいつら・・・まだやるのか！」

シンはビームサーベルを引き抜き、迫り来る三機のジンに突進した。アスランのザクもアックスを引き抜き、応戦に入りあたしも対艦刀を構えた。

「我が娘のこの墓標！落として焼かねば世界は変わらぬ！」

アスランのザクが、ジンの重斬刀をシールドで受け止める。

「娘？」

シンは向かってきたジンを、サーベルで切り倒した。

「な、何を・・・」

「かつての悲しみを忘れ、撃ち合ったものたちと何故偽りの世界で笑うか！貴様らはッ！」

こいつの言うことが正直気に入らないあたし。

「!？」

ジンは更にサーベルを振り回し、再びザクに切りかかった。

「軟弱なシーゲル・クラインの元で・・・ザフトは変わってしまった！何故！何故気づかぬか！」

「何！」

「われらコーディネイターにとって、パトリック・ザラのとつた道こそが
ただひとつ正しきものだと！！！」

ジンの絶叫にアスランは絶句するが・・・

「・・・だからどうした？」

「なに！？」

あたしの言葉に掴みかかるジン。

「逆恨みにご立派な大義名分並べてんじゃねえ！！！」

あたしは目の前のジンを殴り飛ばす。ジンはあたしに斬りかかってくるが・・・

「貴様のような小娘に！！！」

「偉そうな事言ってんじゃねえ！！お前だって同じ事やってんだろうが！！！！何一方向的に被害者ぶってんだ！！！！」

「な！」

あたしの言葉に黙るジン。

「結局お前は・・・何だかんだ自分に都合のいい理屈だけ並べるだけだろ!!! お前の憎む相手と・・・同じ穴のムジナなんだよ! あんたは!!!!!!」

あたしはジンの頭を掴むと握りつぶした。

撤退しようとバーニアを吹かすが・・・

「しまった!!」

重力に囚われうまく上昇できない。

(・・・ペース配分ドジったか・・・どうする)

ジェル摘んでないからこのままだと燃え尽きるあたし。

その時ブラックフレームの左腕に目がいった。

「・・・ブリッツの左腕・・・これなら!!」

あたしは誤差修正し近くのイザークの艦に狙いを定めた。

「行け!」

あたしはグレイブニールを放ちイザークの艦に命中させ機体を手繰り寄せた。

イザークの艦に着地すると・・・

(・・・ニコル・・・助かったよ)

と親友に感謝するのだった。

続く

第四話 レン対シン

第四話 レン対シン

あの後ちゃんと合流したあたしはつかの間の間の休息をしていた。

今の状況でカガリの相談やらアスランの馬鹿の相談を受けているあたし。

（たく・・・ウジウジウジウジ悩みやがって・・・）

正直あたしはウジウジ悩んでいる奴は嫌いだ。所詮はやるかやらないかの選択を御託並べている。あたしはそれが気に入らなかった。そして射撃訓練を見ているあたし。

アスランが手解きしている。

（あゝあ・・・いちゃつきやがってラクスに言っちゃおうかな）

などと思っていた時。

「お？ シンじゃねえか」

「なんだよ・・・アスハの犬？」

「随分な言い方でないけえ？」

シンに睨み付けられるあたし。

「犬にはわかんねえよな！俺の気持ちなんか！！」

「そんなガタガタ抜かすなら・・・あたしが相手になってやろうか？」

「なんだと！何にもわかってないアスハの方を持つのかよ！！」

「・・・ガキがいきがってんじゃねえ・・・」

「なに！！！」

「・・・世間知らずのガキがいきがってんじゃねえよ・・・」

「また言ったな！！」

あたしの挑発に簡単に乗ってくるシン。

（あゝあ・・・こいつやっぱり軍人に向かないわ・・・『守ろうね団体行動』が出来ないんだねゝ少なくともこいつに命は預けたくないね）

軍人の禁句それは私情を挟んではいけない事。悪いけどこいつは私情の塊だった。

「お前だって都合悪くなったら裏切るんだろ！傭兵ふぜいがさ！！」

「・・・だったら試してみる？」

「え？」

「ようはあたしの腕が信用できないってことでしょ・・・エースパイロットだか何だかしんないけど・・・口で言うより実戦で腕見せたほうがいいんじゃない？」

わざとあざ笑うように見るあたし。それ見たシンは。

「いいぜ・・・その分かりやすい挑発のってやるよ!!」

その言葉をゴングにトレーニングルームに四角いリングが作られた。ルールは格闘技術方式、ハンディキャップとしてはあたしはシンよりも扱いづらいグローブ、シンはフィンガーグローブを装着。

「なんだなんだ？」

「喧嘩か？」

何処から嗅ぎ付けたのかミネルバクルーが群がってきた。あたしとシンの喧嘩は格闘技かなんかと勘違いしてるみたいだ。シンの野郎はセコンドにルナマリアとレイが付いた。なんか仲間みたいなのが居ることを自慢した目であたしを見てる。

（・・・精々今のうちに群れておきな・・・見せてやるよ・・・戦いの地獄って奴を）

「ファイト!!」

即席のゴングのようなものが鳴りシンがあたしに向かってきた。

「うおおおお!!」

シンの攻撃があたしに襲い掛かってくるがあたしは避ける。猪突猛进型なのか次々と攻撃がくるがあたしは避ける。または受け止める。

(・・・こういう血気盛んな奴って敵を倒すことしかないんだよね)

はつきり言って攻撃が単調すぎて簡単に避けられる。この間あたしは一発も手を出していない。

「この野郎! さっきから防御ばかりしやがって!!」

怒り狂ったシンはあたしに次々とパンチを浴びせてくるがあたしは決して手を出さず受け続けた。

「この野郎! おちよくるな!」

シンが再びあたしに殴りかかったその時。

「!!」

「え?」

シンの拳をあたしは掴みとった。シンは目を白黒させている。あたしは静かに呟いた。

「・・・攻撃するだけなら馬鹿でもできんだよ」

「なんだと」

（しゃあねえな・・・ちょっと殴られてやるか）

シンの拳をあたしは受けた。顔面やらお腹やら・・・とにかくあたしの身体にシンの攻撃が突き刺さる。シンの野郎はちよつと得意げになった顔しやがった。

実際どうだかしんなけど、こいつの攻撃は全然痛くない。

何と言うか何も感じなかった。

そしてあたしはガードを下ろした。

「なに？」

「なんだなんだ？」

ざわつく外野。シンは完全におちよくられたと思い込んでるしあたしは打って来いと言わんばかりの目でガードを下ろしシンを見ていた。

「この野郎!!」

シンのパンチがまた突き刺さる。

（なんだろう・・・なんでこいつこんなに気に入らないんだろう？）

あたしは余計なことを考えたその時。

「ぐ！」

「はぁ・・・はぁ・・・」

倒れるあたし。何で倒れたんだろ・・・訳わかんない・・・周りじややる気あるのかお前はクズだとか野次飛んでくるし。シンの奴も勝ち誇った顔してやがる。

(・・・うるせえな・・・面倒くさいからこのまま寝てやろうかな・・・)

あたしが目を瞑ろうとしたその時。

「!!」

シンが見たのは立ち上がったあたしだった。

(何で立ち上がったんだろう?・・・こんな奴殴る価値ないのに・・・)

倒れたらこいつじゃない何かに負けた気がしたあたしはそのままシンに向かって構えた。

「ちい!!」

シンの攻撃があたしに降り注がれるがあたしは回避した。なんか目が慣れてきたのか見えるようになってきた。まるで八つ当たりのようにあたしを殴ってくるシン。

「くそ! お前なんかに分かるかよ!! 目の前で家族を殺された俺の気持ちか!!」

その言葉が答えを出してくれた。

(・・・ああ・・・わかった・・・なんでこいつが気に入らないのか・・・)

あたしはシンを見下しながらあいつの事を思い出した。

(・・・ずっと頭の中に引っ掛けてたんだ・・・猛だ)

シンを見ながらあたしは猛を思っていた。

(・・・猛も目の前で両親を殺され・・・見ず知らずの子に命を貰ったんだ・・・目の前で誰かを失う地獄と誰かに生かされる地獄を両方味わってたんだ・・・けど・・・あいつはこいつみたい・・・絶対に全部を人のせいになかった・・・一人で考えて必死にその地獄にもがいて・・・克服した)

「・・・あたしは・・・あいつを見た・・・だから・・・お前みたいな地獄を他人のせいにして生きている奴に・・・負けるわけにはいかない」

シンを殴りつけるあたし。あまりの破壊力にシンがパニックになっている。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

あたしの猛攻にヒビリ始める外野。さっきからシン優勢と思われた試合をあたしは簡単にひっくり返した。シンはあたしに向かって言ってきた。

「お前に俺の気持「生きてりゃ!!辛い事だって笑って話せる時がくるんだよ!!!!!!」!!!!!!」

あたしはシンを地面に殴りつける。

「この・・・野郎」

(しょうがねえな)

あたしはリングを降りるとナイフを取り出しシンに投げつけた。

「な!何のつもりだよ!」

「それ使っていいよ・・・今更遅いけど・・・ハンデだよ」

「く・・・舐めるな・・・舐めるな!!」

シンがナイフを拾い上げあたしの顔面に刺そうとしてきたその時。

「!!!!!!」

「があ・・・ああああ・・・ああ・・・ああ」

シンのナイフとあたしの拳が交差した。いわゆるクロスカウンターをお見舞いした。あたしの頬にはナイフの刃が掠りシンの体が離れるとあたしの頬から出血した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あたしはシンを見下ろしていた。シンの奴は完全に意識を断ち切れ白目を向いている。カウンターパンチは肉体面と精神面の両方向時にダメージを与え本人の受けるダメージは計り知れない。

ましてはこいつは武器を持ってあたしに斬りかかった。あたしの身体にナイフが刺さった事で完全に油断し精神面のガードを完全に解いた。そこにあたしのカウンター・・・ノーガードには答えたみたいだな。

「・・・け」

頬から出血しながらあたしは敗者を後にするのだった。

「なによ・・・あの人」

ルナマリアがシンを介抱しながらあたしを睨み付ける。

「だが・・・これが戦いの現実だ・・・勝者は敗者に振り向かない・・・だが・・・これは彼女なりの情けだ」

「なんで？」

「負けた者は勝った者に情けをかけられるほど惨めなことはない」

レイの一言に考えてしまいうルナマリアだった。

第五話 燻る狼

オーブに辿り着いたあたし達。結局ミネルバはここでしばらく駐在
ってことになってカガリの護衛って事になってたあたしとしてもこ
こで任務は終わる。

第五話 燻る狼

「さてと・・・」

とりあえずブラックフレームに乗り込んだあたしはジャンク屋まで
持っていった。

正直、この船の奴らに整備させるのは性に合わない。

「こりゃ・・・派手に乗ったな・・・」

そう言ってブラックフレームを整備しているおっちゃん。あまり正
規の施設じゃ乗り回せないからねこれ。

「そういや・・・猛の奴どうしてる？」

「ああ・・・孤児院で収獲してたけど・・・突然居なくなっただぜ」

「そっか・・・いつもの場所か」

あたしはそう思い猛の向かった先を推測した。

「・・・・・・・・」

仲間と折り合いがつかず一人バイクを飛ばしていたシン。

足の向くままに何処かへ向かうと慰霊碑に到着した。

「慰霊碑・・・ん？」

誰かに気づいたシン。

慰霊碑でシンが見たのは

右目に傷がありとても同じとは思えない不自然なオッドアイ。

ごつごつした左腕と違い女性のような繊細な右腕・・・

そして

狼のような孤高さを感じ取らせる青年だった。

S i d e t a k e r u

「誰だ？」

なんかの衝動に駆られて慰霊碑に着た俺。誰かの気配に振り返るとそこには一人の少年がいた。

「・・・あんたこそ・・・誰だよ？」

少年の言葉に俺は答えた。

「・・・通りすがりの罪人って奴かな・・・」

「通りすがりの罪人？」

「まあな・・・うー！」

別に用もなかったから少年に挨拶を済ませて帰ろうとすると突然右腕と右目が痛み始めた。

「おい大丈夫か？」

「心配ねえよ・・・」

少年が近づくと急に痛みが引いた俺は立ち上がり虚勢を張った。

「罪人さんは・・・懺悔でもしてんのか？」

「さあな・・・ただの自己満足かもな・・・」

少年の言葉に答える俺。正直ここにすれば弔いという名の言い訳が出来る。

「あんた・・・前の戦争に参加してたのか？」

「・・・ああ」

「人は殺したのか？」

「・・・ああ・・・殺した・・・俺は助けられなかった」

俺は右腕に宿っているあいつを思った。

「・・・けど俺は抗わない・・・一生背負って生きていくさ」

「単純だな・・・」

「俺馬鹿なんで」

そう言うのと今度は少年が俺の目の前から去った。

その少年を見送りながら俺は再び右目が痛み始めた。

右目と右腕が痛む・・・これはマユが何かを訴えている証だ。

「たく・・・そういう事かよ・・・厄介なもんもらっちゃまったな・・・また戦いか」

そう言って握り拳を作る俺。

「やるしかないんだな・・・俺は」

そうして何かを決意する俺。

「シルバーフレイムのオーバーホールは完了してる・・・やるか。心配すんなマユ。お前にもらった命だ・・・粗末にしねえよ」

そう決意し俺は再び戦いに身を投じるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888/>

機動戦士ガンダムSEED DESTINY 蒼天の黒龍

2011年10月6日03時39分発行